

Title: The Resurrection

By Dr. W. Eugene Scott, PhD Stanford university

Preached at the Los Angeles University Cathedral

Copyright ©2007, Pastor Melissa Scott; all rights reserved

題名: 復活

W・ユージーン・スコット牧師、スタンフォード大学博士

ロサンゼルス・ユニバーシティ聖堂での説教から

Copyright ©2007, Pastor Melissa Scott; 全ての著作権はメリッサ・スコット牧師に属します。

復活

私は大学時代、信仰を失いました。微妙な心理的プレッシャーを受けたからです。イエスを普通の「善良で賢い」先生とみなしていれば問題はありませんでした。イスラム教開祖のモハメド、仏教開祖の釈尊、中国とその周辺地域に多大な影響を与えた言葉を残した孔子（もともと彼の場合はむしろ政治哲学者ですが）、要するにこうした立派な宗教開祖たちと同等にみなせば良かったのです。

イエスをこのカテゴリーに入れて、「善良で賢い先生」として扱えば、私は学者として受け入れられました。しかしイエス・キリストは神の子であり、よって万物を超える存在であるという信心を持つと受け入れられません。ところで最近、テレビで一時間ほど、宗教の源は何であるか

を教えるビデオの宣伝をしていました。ここで少し述べておきましょう。

番組によると宗教はエジプトで始まったとされていますが、そもそもその宗教の発祥地であるシュメールに遡りません（バビロンにも決して行き着かなかった）。また、エジプトのヘブライとギリシャに与えた影響を否定するだけの知識を持つ人は出てきませんでした。この説はサイラス・ゴードンによつて打ち出されたものです。

この宣伝番組には小柄な男と、物腰の柔らかい、髪を奇麗に撫でつけたテレビ伝道師のような男が椅子に腰掛けて、出演しています。二人は全ての宗教がいかに始まったかを話し、十字架にかけられた十六人の救世主を参照として引き出してくるのですが——その参照から何の宗教の源も見いだせません。

これは、最近流行りの「世界教会主義的な見方」の一例に過ぎません。——つまり（スタンフォード大学比較宗教学の教授たち曰く）全ての宗教の「根源は同じ」であるから、（彼ら呼ぶところの）無宗教の宗教を提示しているのです。このアプローチが私にも適用されました。キリストは、万物を超えた神の子であるとみなす「原始的」な姿勢から卒業しない限り、理的とはいえない、その代わりイエスを宗教の開祖とみなせば良い。いわば単なる「善良で賢い先生」として扱えと、説得力を持つて言ってきたのです。

しかし、超自然のキリスト信仰の知的代用品「善良で賢い先生」信仰には、一つ問題があります。それは**イエスが善良と賢明の両方でない限り、善良とも賢くともなれない、という問題です**。

善良であるためには、真実を話さなければなりません。気が狂っていても、頭がおかしくても、とてつもなく間違った事を心から信じていて

も、善良にはなれます——しかし賢くはありません。

賢明であるためには、正確であらねばなりません。善良であるためには正直であらねばなりません。「彼ら」のイエスは、善良ではあるが賢くはないか、賢明ではあるが善良ではないかのどちらかであり、善良であつて同時に賢いということはありえないのです。なぜでしょう？

仮にみなさんがイエスを善良で賢いと呼ぶとしましょう。みなさんはこの根拠を歴史上のイエスの語録や行動録に求めるでしょう。私は史料を福音書だけに限定しません。たとえこれがキリストの超自然性を否定する人たちの根拠資料として使われ、イエスの言動を探り、抜粋し、テレビなどで、特定の箇所へ赤線を引いて説明する始末であつても、です。

福音書からさらなる史料へたどることもできます。仮説Q文書というものがあります。

ある初期教会教父によれば、マタイはイエスと旅をする傍らでイエスの語ったことをギリシャ語ではなく、出生地の言語であるアラム語で記録したとされています。私たちは、マタイの福音書は、ギリシャ語を使つてアンテオケで書かれたと見ています。アラム語の「イエス語録」は、おそらく福音書の共通する元本資料であつたのでしょう。ギリシャ語に堪能であれば、福音書の中で、文体の変わる箇所を確認することができます。その箇所を集めると、共観福音書著者であるマタイ、マルコ、ルカが使用した元本資料（特にマタイとルカ）を再構成できます。

大半の現代の学者は、マルコによる福音書が最初に書かれた福音書であると認識しています。マタイとルカの文体の変化から、彼らがマルコのたとある箇所を書写したのが伺えて、そう憶測しているわけです。共観福音書のもっとも有力視されている「共通資料」は仮説「Q」文書（ド

イツ語の「源」から）と呼ばれています。このほかにも、最古の断片史料や古代の詩歌を調べることもできます。しかしどの資料を利用したとしても、イエスの言動と対面することになります。どの記録もキリストによる話し言葉、むしろは、イエス自身が持つていた「善良でかつ賢い」という自己イメージが投影されています。各資料から次のようなことを探し出せます。

一、イエスは自分を完全無欠と思つていた。

彼が事実そうであつたかどうかは問題ではありません。彼はそう思ひこんでいたのが問題なのです。カーライル曰く、あらゆる罪の中でもっとも罪深いのは、罪の意識の全くないことである。自分は全く間違いを犯していないと確信している人ほど嫌なものはありません。この自意識、自分は正しい、完全だという姿勢のある人に対して、私たちは反感を持ちます。なぜなら人間は誰も完璧ではないのを理解しているからです。

ここで扱っている問題はイエスが本当に完全無欠であるかどうかではありません。私たちは、自分のことを完璧と思い込んでいる人を聖人に仕立てあげないということです。神に召しを受けた人々の記録を見れば、彼らは完全ではないと自覚しています。この姿勢は旧約聖書中一貫しています——「私は全くあなたの慈悲を受けるにふさわしくない者です——一体こんな私をイスラエルの民を指導する資格などありませんか？——私はただの幼子です。話す事すらうまくありません」と。

神に受け入れられる者、人々に受け入れられる者は自己が不完全であると自覚しています。聖人は神といかにかけ離れているかを認識しています。イスラエル王国の中で唯一、神を実際に目撃した人がいます。預言者イザヤがその人で、ウジア王が死んだ年に、高くあげられた玉座に

座す神の御姿を見ました（イザヤ書六章）。その時イザヤ曰く、「ああ。私は、もうだめだ」。

私たちは自分を完璧だと思い込んでいる人を聖人とみなしません——ところが、イエスは自分を完全であると思いついていました。どこでイエスを調べても、彼はその姿勢をはつきりと示しています。彼は他人を裁いています。「白く塗った墓」だの「ぶよは、こして除くが、らくだはのみこんでいます」だのと。彼は当時の大変立派な義人たちを非難しています。他人を裁いてはならないという理由は——これはどの裁判官も常に意識すべきことですが——私たちは心の奥底で互いに同等の欠点を持つているため、同じ人間を裁くのが難しいからです。

しかるにイエスは自分が不完全であるという意識を全く持っていない。彼は法を変えて、こう言いました、「法はしかじかと定めているが、聞きなさい、わたしはこう言おう」。それから独善的に、自分は道徳的に完全であるという意識をもって「私は律法を廃止するために来たのではありません。むしろ律法を成就するために来たのです」と言い放ちます。

ただ一つだけ例外らしき記述があります。それは、ある金持ちの役人がイエスを「良い先生」と呼んだ時です。イエスは彼の話しをさえぎり、「なぜ、わたしを『良い』と呼ぶ」と答えました。イエスが自己を完全とみなしていないと考える人たちは、この部分を指摘します。しかし彼らはこの後を見落としています。イエスはこう言っています、「待ちなさい。気軽にわたしを良いラビ、良い先生と呼ぶものではない。もしわたしのことを良いと呼ぶのなら、良い方は神御一人だと認めなさい。わたしが神でもあるという認識なくして、その呼称を使うものではない」。

イエスはこのように、自己は完璧であるという道徳観を持っています

た。彼の言動に、欠点があるという意識は一片も見いだせません。

二. イエスは全ての権力を自身に集約した。

イエスは全ての権威をつかさどっているとまで言いました。「わたしのことをいしずえにする者は、岩の上に建てた家。そうでない者は砂の上に建てた家。天地全ての権威を私は授かりました」

繰り返しますが、イエスは律法について「法はしかじかと定めている。けれど待ちなさい。わたしはこう言おう」と述べています。彼は顔色一つ変えずに、裁断を下しました。

さて、私たちはこういった人を聖人とみなしません。恐らくみなさんも何様のつもりだと聞きたくなるでしょう、「あなたは何を根拠に、そんな権威を主張するのだ?」。イエスは「わたしはこう言います」と自身自身を根拠としています。

三. イエスは自らを宗教界の中心とした。

彼の言動はとどまらず、さらに自分は宗教の中心だと述べました。イエスは自己を切り離して説教をしたり、真実を説いたりしませんでした。彼は「わたしは道。わたしはまこと。わたしは命。わたしは門。わたしを通して入るのなら……わたしは羊の門です。わたしよりも父や母、息子と娘、兄弟姉妹、自分のいのちを憎く思わず、自分の十字架を背負ってわたしについて来ない者はわたしの弟子になれません」と述べました。イエスは私たちに、イエス本人を信仰の中心におかねばならないと断言しています。

四. 彼は永遠の国の住人出身として語った。

誰もが自宅に対して、ある前提を踏まえた親近感を持っています。例えば、私がごく当たり前に「私の家の書斎にある椅子は茶色です」と言

ったとします。これを聞いてみなさんは「どうしてそんな事がわかるのですか」とは問わないでしょう。私たちは自宅について語らずともわかる「内輪の知識」を持ち、そのような姿勢が言動に現れます。議論は起こりません。私たちは相手が信じるのを予期します。永遠について語る時のイエスも、これと同じ姿勢です。彼は普通に「わたしは（遣わした方のところへ）戻ります。あなたがたのための住まいを備えに行きます。そしてしばらくしてから、わたしはまた来て、あなたがたを連れていきます」と言います。

またごく自然に「アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです」とか、「わたしはサタンが天から落ちたのを見ました」とか、「ひとりの罪人が悔い改めるなら、天国の天使たちに喜びがわき上がります」と言っています。彼は永遠について「内輪の知識」を持っている印象を私たちに加え、地球の形成される前にも後にも神と共に天国の中にいたという印象を与えています。

五、イエスはあがない代として死ぬ。

イエスは世界の何かが間違っていて、それを直すには自分が死ぬ以外に方法はない、つまり彼は「あがない代」であると言いました。彼は聴衆が理解できる文脈においてこの単語を使いました。あがない代とは、ある基準に達せなかったり、悪行を犯したために相続権を失った時、その権利を取り返すために支払われる代償金のことを指します——あがない代は、一度失ったものを取り返します。イエスは、全世界が行く手を失ってしまったから、みんなをあがなう為に、自分が代償金として死ぬと言ったのです。

六、イエスは復活する。

イエスは死からよみがえると述べました（本来はもっと詳細を述べているのですが、今はごく一部だけを選び出しています）。つまり彼は一度死んだら、生き返ると言いました。

さて、牧師であるこの私が、この教会の壇上で、マイクを取り上げて「この世から天に及ぶ全ての権威を私は授かりました」と言い放ったとしましょう。みなさんは、おそらく牧師は「神の御言葉を説教する権威を授かった」という意味に解釈し、受け流すことにするでしょう。

しかし私がさらに、まるで神に向かって「父よ。あなたが私に行わせるわざを、私は成しとげました。私には落ち度は一つもなく、不完全なところが全然ありません。私は律法に惑わされることなく、律法を全うしました」と言い、そしてイエスのように完璧であることを主張しはじめたら、みなさんは後ずさりを始めて、私の妻に同情のまなざしを向けるでしょう。しかも続けて「あなたがたの永遠の行く末は、私をあなたがたの生活の中心におき、あなたがたの主人とみなすか否かによって決まります」と言うにいたれば、みなさんは私の話を止めて、完全に気が狂ったと思われるでしょう。多分、今私が省いた主張へ到達する暇さえもらえなかったでしょう。すなわち自分は天国の住人であるとみなさんに信じさせようとする事。

それで私が講壇に立って、霊的表現ではなく、あたかも実際の経験として次の事をみなさんに信じるように求めたらどうでしょう？——「アブラハムが生まれる前から私は存在しました。ほら、例のウル出身の男ですよ。私はそこにいました。アダムが生まれる前、サタンが天から落ちるのを目撃しました」。

続いて私が自宅を語るような親しみをこめて、天国について話しはじ

めたとします。私が自宅のソファはベージュ色であると話し、みなさんが「どうしてわかるの？」と問えば、私は「だって、そこに住んでいるから！」と答えるでしょう。私はこれと同じ親近感で天国について主張しているのです！ 普通でしたら、こんな話をする人を精神病院に放りこみます！ それから私が世界のあがない代であるなどと言うようであれば、誰か私を手遅れになる前に、妻と一緒に（イエスの御名によって癒しを行うべく）私の頭の上に手をかざしてください。

そろそろ気付いていただけでしよう。どの資料を読んでも、歴史上に登場するキリストは、これらのありえない自己を主張している人物で、いかないのです。他の宗教開祖にイエスのような言動をした者はいません！ 釈尊は自分を完全無欠であるとは一度も思いませんでした。彼はタニヤの要素で葛藤をしていました。タニヤとは罪をつくりだす墮落した欲望のことを指します。釈尊は五感の欲望から解放される道を求めました。彼は観念的なヨギの道に解放を求めました。がどちらも道は得られなかった。彼は八正道の実践により、ニルヴァーナと呼ぶトランス状態に似たような境地で、生における自我からの脱却を果たしたのです。そして悟りを得てから、釈尊は弟子たちに八正道を勧めました。「私にはうまく行きました。試しなさい。きっと到達できるだろう」と言っただけです。

彼は決して全ての権威が自分に集約しているとは思っていませんでした。むしろ弟子たちに自分は指導者としてふさわしくない、とまで言っています（この言は三部にわかれた教典に書かれています）。彼が弟子に残したのは、自分に合った実践方法だけでした。自分に天の権威が授けられていると思ひ込んでいません。彼は自分が宗教界の中心などとは一

度も思いませんでした。彼は八正道、「道」を極めたのです。他の人たちもこれと同じようなものです。

モハメドは自分が完全無欠とは決断して思っていました。彼は神——アラ——の預言者でした。彼は永生のビジョンを見て、砂漠の民を驚かせました。しかし、彼はその永遠の国に暮らしていたとは主張していません。彼は誰かのあがない代として死んではいません。彼の権威は、神がビジョンの中で示されたことにあります。イエスはしかし、ビジョンを見た他の預言者のように「神はこうおっしゃられる」とは言っていません。イエスは「わたしはと述べる」と言っているだけです。孔子は国家社会の論理的探求を行い、その儀礼の分析において権威です。

開祖は誰一人として、自らを宗教界の中心におき、全ての権威を自分に集約し、自分は完全無欠な存在であるという意識を持ち、この世においてもあの世においても自分は絶対者で、この世にはほんの一時期しかないなどと思ひこんではいません。尊敬される開祖にこのような特徴を示したり、主張しているような者は、人もいません。だからこそ、人はみな、彼らを「開祖」として敬愛するわけです。

さてイエスの事になりますと、C・S・ルイスが述べたように「驚くべき選択」があります。イエスの主張したことは正しいが、頭が弱すぎてその主張が人間技ではこなせないのに気付いていない、つまりイエスは賢人であるはずがない。あるいは、イエスは賢くて、一連の主張は真実ではないと自覚しているが人々を自分に従わせるように、うまく信じ込ませた。するとイエスは善人ではなくなる。結論すれば、イエスのことを「善人でありかつ、賢い先生である」とみなす人たちは歴史上実在したキリストをはつきりと観察していないのです。

みなさんはキリストが頭のおかしい人であるか、それとも本人が主張する通りの人か、どちらかの見解に立つべきであり、もし彼が神であるなら、イエスは**本当に**完全無欠であり、あらゆる権威は**本当に**彼に集約しており、イエスは**確かに**宗教の中心であり、そして**まことに**世界のあがない代として死なねばならない資質があります。彼が**本当に**永生の知識を持つならば彼は死からよみがえるべきです（実現したのですが）。

イエスを当たり障りのない「善くて賢い」先生という箱に押しこみ、片付け、忘れるべきではないのです。イエスは頭のおかしい人か、詐欺師か、**本人の主張する通りの人**でしかありません。

さて、私がこの岐路に行きついた時、自分で解決しようと決めました。この問題の答えには史実がからんでいます。イエスは、証拠を求めた人に対し、「一つだけ現しましょう」と答えました。信仰を築きあげる確実なしるしはたった一つ。神は時としてこれ以上の保証もなされましたが、御自分の真実を立証するための、**神が承認されたたった一つのしるし**はヨナのしるしであり、これをイエスはキリストの死と**よみがえり**の意味であると解きました。

大いなる歴史の流れの一点で事実が見え始めます。神は、人間の肉体という天幕へ入り込む計画を立てられました。そして律法の化身となるために律法を全うし、私たちの代わりにあがない代として死ぬことを選んだのです。つまり、律法を完全に守り尽くし、死からよみがえって、私たちを家族として引き取り、律法の重荷無き新しいいのちを与えてくれる。私たちにとって律法とは、私たちが全うするために神の救いの力を必要とするのを教える教師にすぎなかったのです。

神が人間の歴史の中に現われた、というのがクリスチャニティの主張

であり、神はご自身を分析可能な歴史事実で立証されたのです。

ところで確実な歴史というものは無いというのが事実です。私はこの事を、大学で歴史を学んでいる時に習いました。確実な史実というのは、**考えられる**あらゆる証拠があるという事です。ある事件が確かに起こったとみなさんが**納得**するだけの証拠がないと、史実の確実性は得られません。ある事件が起こって、過去のものになってしまっていると、その事件への直接の目撃者にはなれません。カメラはもちろん役に立ちますが、生の要素はなくなっています。従って全ての確実な史実というのは定義により相対的なものです。私たちが頼みにするのは心理的確信であって、それは相対的な史料証拠に触れて引き起こされる心理反応です。この反応は否応なく引き起こされます。

優秀な弁護士は、時々裁判で言及した事項が不適切であると裁判官から叱責されます。しかし弁護士は何を言ってはならないかを承知です。実は意図的に陪審員に聞かせているのです。裁判官が弁護士を強く叱りつけば、彼は「わかりました」と他愛ない従順な役を演じます。彼は意図的にやっているのです。裁判官は、尊大な態度で陪審員にこう言い渡す、「今の発言を考慮から除外するように」。オーケー、ガッン！一度耳にしてしまったものを除外するには、頭を強打するしかありません。一度見たり聞いたり感じたりすると、他にどんな証拠があるうとも、何らかの反応を引き起こさざるをえないのです。

神は復活によりご自分の息子を立証された。

パウロがアレオパゴスを訪れました。そこで哲学者たちが集まっていた、全ての神々について思索するにあたり、一人の神も見逃さないように、知られない神に対しての祭壇を設けていました。パウロはその祭壇を糸

口にしてキリストについて話し始めました。彼は「知られない神が誰なのか教えましょう」と述べ、キリストを説き、神が復活によりキリストを定められたと述べました。パウロ曰く、復活がなかったら私たちの信仰はむなしくなり、神の偽りの証人となる、なぜなら、私たちは神がキリストを死からよみがえらせたと言言しているからです。

教会の最初のメッセージは、五旬節の日、「あなたがたの知っているイエスは……」とペテロによって説教されたものです。彼はキリストが十字架にかけられた事を誰もが知っている事実と指摘し、聴衆もその事を知っていました。それからペテロは未知の事柄を話しました。「このイエスを神はよみがえらせた。私たちはみな、その証人です」、そして立証できる事実を紹介した。パウロの説教の中で、「彼は目撃された目撃された」と述べ、目撃者を列挙し、群衆に向かって「五百人の兄弟たちの前に同時に現れた」と述べました。当時、目撃者を集める事は可能でした。現在、それは不可能です。しかしほかの史実と同じく、シェークスピア作品を本当に書いたのは誰からジュリアス・シーザーの實在に至るまで、歴史の事実を調べていけばいいのです。クリスチャンティの基盤は**イエスが墓からよみがえった**という史実です。

考え方の筋道を設定しましょう。例えば今この教会にイエスと同じ主張をする人がやってきたら、私はその人に病院へ行くことを勧めて、精神分析を受けるよう提案します——彼らが明らかに冗談を言っているのではない限り——なぜならどんな人間もこのような主張をできないからです。しかしある人が「私を殺してみなさい。私は三日後に墓場から出てきて、空に昇りますから」と言い、本当に三日後によみがえって、青空へ昇っていったら、私は考え直します。私の信仰の基礎は、死から

の復活以外に何も必要としません。この証拠以外、込みいった哲学的三位一体論の教義は必要ありません。死からの復活が本当に起こったのであれば、この者こそがパーソナルで本物の神へと踏み出すスタートラインとなります。

私の求める神は、歴史舞台の上に現れ、自分の生涯をかけて研究できる言葉を発する者であり、全ての権威を掌握し、宗教と万物の中心であり、しかも私をあがない、よみがえらせてくれ、永遠の国に住まいを整えてくれる者で、このような神を発見できれば私は満足です。これが私のスタートラインです。

問題は——彼は墓から出てきたのか？

これはただ座って考えて答えを出す問題ではありません。研究しなければいけません。さて、何事も研究する上において、私たちは**前提**を踏まえていないといけません。人の思考はたいてい中途半端です。彼らの議論はたいがい次のようなものです。復活は起こらなかった、なぜなら復活など起こるはずないから、よって復活が起こったと言う人は嘘を言っているに違いない。ところが復活以外の事実は、研究します。

みなさんが「スコット氏は今日、この日曜日に、説教を一時間以内に語り終えたか」と聞いたとしましょう。まず私がここに居て、説教を行ったと想定します。教会の存在も想定します。この日曜がやってきて、過ぎたと想定します。これらの事項は議論の対象になりません。私たちは説教が一時間以内に成されたか否かを取り決める時、これら事実を当然と決めているからです。私が一時間（以上）説教したかを議論する前に、少なくとも私が説教をしたと同意しましょう。みなさんは、私の説教が良かったか悪かったかに同意する必要はない、だが私がここに居て

口を開いて何かを話した事を同意すればよい。これが前提というもので——当たり前としている事項です。

仮に誰かが「スコット氏が教会に居たとは信じていない！」と言えば、議論を止めましょう。私が教会に居たと証明するのは、私がどのくらい長く説教をしたかを証明するのよりずっと簡単です。というのもみなさんは、私の説教がいつ始まったのか、まだ知らないからです。前置きからなのか？ 黒板に文字を書きはじめた所からか？ こちらの方がよほど議論の対象になります。しかし私が教会に居たか否かを証明するのは、ずっと簡単です。

みなさんはこれと同じ姿勢で復活に対処する必要があります。復活を議論する前に、前提とすべき事実がいくつかあります。その一つは、イエスが実際に存在したのか？ 彼の存在を信じていないのであれば、なぜ私たちは彼がよみがえったか否かについて話しているのです？ この事について検討された時代はありません。今はほとんどされません。今日の目的と復活の意義ある議論のため、少なくとも次のことを決めてからねばなりません。

事実一、イエスは実在した。

これを信じていないのであれば——少なくとも彼がある時代のある地域に存在したと証明するのは、彼が死んでよみがえったことを証明するのよりは簡単であるのには同意するでしょうか？ 同意しますか？ でしたら私の仕事を軽くしてください。「いや、彼が存在していたかどうか疑問だ。だから復活の話はしないでくれ。私はそんな検討をする以外に、やることあるのだ」というイエスの存在を信じていない者と、復活の言い争いをしないように。存在を証明するのは簡単なのでから。この証明を

成すまでは、次の事項に移らないように。

事実二、イエスは、エルサレムのある特定のユダヤ教指導者の仕向けによって十字架に張りつけられた。本処刑はローマ政府の命令によって実行された。

あるユダヤ教の指導者により（全てのユダヤ人の責任ではありません。イエスの弟子たちもユダヤ人です。ある特定のユダヤ人指導者たちです）、ローマ人が処刑を実行した。この事実を信じないのなら、復活の論議を始める意味はありません。十字架刑は復活を証明するよりは簡単です。

事実三、イエスは死亡したとみなされた。

私が「みなされた」と表現したことに留意してください。なぜなら、イエスが墓場から出てきたと信じる人たちの中には、彼は仮死から蘇生したと信じる者が少数数とはいえ、いるからです。彼は死亡したとみなされ、脇腹を貫かれ、十字架から降ろされ、墓に葬られました。もちろん、ある理論家はイエスが蘇生の訓練をして、再び墓から出てくるのを納得した上で、自分を墓場に運ばせたという説を作りあげました。（その説によれば）イエスはまずラザロで練習したといえます。しかしラザロはすでに体が腐っていました。このように学説の中には、復活を認める以上に無理をしているモノが多々あります。とはいえ少なくともイエスは死んだとみなされました。このことについて信じていないのなら、復活を議論するのは時期尚早です。

事実四、イエスは誰もが知っており、お参りできる墓に葬られた。

当時の人々、特に十字架刑に関わったユダヤ人とローマ人指導者たちは、イエスの墓の位置と、そこに近づくのを知っていました。岩戸と墓守りがついていましたから、墓の中には入れません。ですが墓の在り

処は周知で、誰でも訪ねることができました。

事実五、イエスはよみがえらされたと言教された。

今の時点で私は彼が復活したと断言していません。だが彼は復活したと言教されました。彼の墓は空であり、よみがえらされたと言教されました。ここで覚えておくべき重要な事柄は、墓が空にしていること、彼が死からよみがえったこと、天に上げられていったことという三点が全て主張され、言教されたことです。

さて、イエスについて、これらの主張が言教されたのを信じていないのなら、私は今日指摘します。イエスについての言教は彼が処刑されてから間もない頃に、地元で行われました！ この三点事項を含む言教がなされたのを信じていないのなら、復活を証明するよりはずっと簡単です。

事実六、十字架刑を執行するように煽動したユダヤ教指導者は、今日の我々よりも誰よりも復活否定に熱心であった。

十字架刑をそのかしたユダヤ教指導者が、(事件から)二〇〇〇年離れて、疑心を抱いて知的に復活を検討する人たちより、よほど復活を否定するのに必死であつたろうと常識でわかります。なぜならユダヤ教指導者の名誉と生計といのちがかかっていたからです。彼らがイエスの十字架刑をそのかした、イエスが自分の王国を建てると主張し、神への不敬を働いたと訴えた後で、いきなりイエスの復活が事実となつてしまつたら、彼らは廃業します。ですから常識から言つて、彼らが復活理論の否定に誰よりも心理的に熱心で、そのためには、現在の復活祭に否定論を振り回す人たちよりも、力を入れるでしょう。

事実七、弟子たちは、イエスの復活を主張して伝道したため迫害を受けた。

弟子たちは、この言教をしたがため過酷な迫害を受けました。最初はユダヤ教指導者によつて始められました——まず彼らは弟子たちを嘘つきと呼び、それから死体を隠したのだと訴えました。聖書の「使徒の働き」にこの弟子たちの復活を宣べ伝えた事によつて迫害された様が記載されています。

何世紀も後になつて、クリスチャン全般がローマ帝国の邪悪な人たちのかっこうの餌食となり、別の理屈でもって罰せられています。しかしこの初期の迫害は、弟子たちがイエスの復活と昇天のメッセージを止めれば、迫害を免れたとどの記録にも残っています。ユダヤ教指導者の名誉がかかっていたので、弟子たちをしいたげたのです。ゆえに、

事実八、墓は空であつた。

全てはこの事実に戻ります。常識的に考えて、十字架刑を煽動したユダヤ教指導者たち(事実二)が、まさきに墓へ飛んでいつて、遺体を確認するはずで、彼らの生計に関わる問題ですから(復活否定に)熱心なわけです(事実六)。そしてイエスは周知の、訪問可能な墓に葬られていました(事実四)。(遺体の発見された記録は聞こえてこないの)で墓が空であつたのは明白です。

墓の価値がなくなつたのは、中が空であつたからです！ 何世紀も過ぎると墓は歴史の中に埋没されていきました。そこに遺体になかつたからです！ 死体無き墓に関心は寄せられなかつたのですが、「遺品時代」が盛んになると、人々は彼の墓に興味を持ちはじめ、墓を探し出そうとしました。

それでいまだに教会の間で、イエスの墓の位置を聖墳墓教会であるか、大半のプロテスタントの支持するゴードンの墓であるかで、意見が割れ

ています。ゴードンの墓はバス停からすぐの急斜面にある「ゴルゴダ」と呼ばれる岩の下にあります。その上にはアラブ人の墓地があります。論争が起こったのは、墓は歴史の中に埋没されてしまったからです。死体がなかったから忘れられてしまったのです。

さて一連の事実は、復活を証明するよりは簡単ですが、これら事実を受け入れない限り、どの復活論にも取り組むことはできません。例えば、（復活の）説教は非常に効果があるので、何世紀にも渡って人々は復活を説明する理論を考え出してきました。ところで私が毎年復活祭にこのメッセージを説教するのは、教会へ入る時、駐車場に脳みそを置き去りにしないで良いという事を示したいからで、理知的分析を整理しているのです。

人を無理矢理信じ込ませる必要はありません。人はある証拠に触れれば、内で何かが触発され、心理的反応を引き起こします。

復活を否定して、そのまま気に止めずにいる人たちが私が非難するのは、彼らが生涯のうち十五時間かけて復活の証拠を点検してもいないという点です。私が十五ほどの質問をすると、それがすぐに知れます。

もし復活が本当であつたら、これこそが全ての中心です。もし復活が本当であつたら、これこそが**歴史の中核となる事実**です。これほどの出来事に対して、一生涯の内でも三十時間割いて勉強するのは無駄だと考える人は、傑出したおろか者です。実際、復活の証拠を調べてみて、納得した知識人は世界でたくさん出ているのだから、なおさらでしょう。それゆえ私はこの説教を行うのです。弟子たちの説教の性質は誠実であつたから、彼らの信心を解釈しようとあらゆる仮説が次のように出されてきました。しかし、いずれも先に述べた八つの事実を踏まえてみると

仮説として成立しません。

仮説一……弟子たちが死体を盗んだ。

仮説二……ユダヤ人指導者たちが死体を盗んだ。

仮説三……ローマ帝国指導者が死体を盗んだ。

仮説四……女性たちが間違った墓場を訪ねた。

当時、日が落ちて暗かったですからね、女性ウォーカーだから、迷子になってしまった——当時女性ドライバーはいませんでした。女性ウォーカーはいたわけです。彼女たちは間違った墓を訪ねて、イエスはよみがえったと信じ込んでしまい、「お墓参りしたけど、イエス様がない」と大騒ぎして、墓地から走り出たが、実は他の死体を待っている空き墓を訪れただけ。

仮説五：全ては幻覚だった。

神々しい昼中夢。弟子たちは心底から（復活が起こったと）信じていた。なぜなら集団で幻覚を起こしていたから。

仮説六：蘇生論

イエスは十字架にはりつけとなり死亡したと思われ、周知の墓に葬られたが、実際は死んでいなかった。そして墓の中の冷気に触れて蘇生し、体にぐるぐると布を巻いたまま墓穴から出てきて、偶然にもありがたく墓守りが眠っている、そこで岩戸を押し滑らせて——フランケンシュタインのごとく再登場！

仮説七：弟子たちは嘘をついた。

弟子たちは全てのことをでっちあげた。賭けた馬を外してしまったごとく、どうしてもあきらめきれず、全ての話を創作し、しかもその話を思い付くのに七週間もかかり、それから触れ回った。

仮説八：全ては本当である。

弟子たちは実際に体験した事、目撃した事をありのままに話していました。さて、みなさんが歴史上のイエスを考察した時「驚くべき選択」と対峙したのと同じく、イエスは狂人か、まぬけか、詐欺師か、彼の主張通りの人か、主張通りの人となるには、神であるという定義が必要であり、ここでも「驚くべき選択」へ至りました。

これらの仮説は個別に聞くと、大半は納得のいくものです。仮説一（弟子たちが死体を盗んだ）でさえも、実際にはユダヤ人指導者が言いはじめたのですが、説得力があります。だがこの仮説は突き詰めると、弟子たちは嘘をついていると非難せざるをえなくなる。ここでみなさんはまたもや「驚くべき選択」を突き付けられました。

私は——学生時代、歴史を勉強していた時からそうだったのですが——自分は客観的で正しいと思いついてる歴史家が大嫌いでした。「私は客観的な人間である。従って具体的な意見など持ち合わせない」という学者。学識のある人で、意見を持たない人などいません。知識は意見を否応なく生み出します。事実以身を浸していない時だけニュートラルでいられるのです。知識は何らかの見解を引き出し、みなさんが今並べたようなイエスに関する事実を調べていくと、畢竟、選択肢がたった二つに絞られます。弟子たちは嘘をついたかあるいは弟子たちは正直に真実を報告したか、このどちらかにしかならない。ではそれぞれの仮説を点検して、オプションを引き出してみましよう。

一、弟子たちが死体を盗んだ（仮説一）のなら、明らかに彼らは嘘をついています（仮説七）。

二、ユダヤ人指導者が死体を盗んだ（仮説二）？ こうすると次の事実

を排除せねばなくなる。ユダヤ人指導者たちは他の誰よりも伝道を否定する事に心をくだいていたなら（事実六）なぜ彼らが墓を空にする必要があるのか？ 仮に彼らが隠したとしても、弟子たちが騒いだ時「さて、我々はイエスの死体を取り出したのだぞ」と言わないでしょうか。指導者たちはそうすることさえ思いつかず、ただ弟子たちが死体を盗んだのだ（仮説一）と訴えたというわけで。それでもまだこの説を支持できるとして、弟子たちは、空の墓と復活だけを述べたわけではない。彼らは生きているイエスを目撃し、彼と食事を分かち合ったと言っている。彼らは同じ情熱でもって、昇天を伝道しています。ですからユダヤ人指導者が死体を盗んだという説は墓の空である説明はつくが、弟子たちはこれに復活したイエスとの出会いと昇天の話を付け加えているのだから、彼らは大げさに誇張したことになります——すなはち、弟子たちはまだ嘘をついている。

三、ローマ帝国指導者が死体を盗んだ（仮説三）？ エルサレムでとんでもない論争が巻き起こり、十字架刑の執行を可能にするほどのつながりをローマ人との間に持つユダヤ教指導者は、ローマ政府が死体を回収したと明らかにしないでしょうか？ しかしこれも空の墓の説明はついても、復活したイエスとの出会いと昇天に関する伝道をした弟子たちの責任を軽減しません。弟子たちは依然として嘘をついています。

四、女性たちは間違った墓へ訪れた（仮説四）？ 墓は有名で、訪れることができました（事実四）。ユダヤ教指導者の利害にからむ事ですから（事実六）、彼女たちをこの知られている墓場に連れていくであろうし、間違った墓説を説明するには、遺体のある墓に行けばすむことです——実際、そのようにしたはずですが。

五、妄想説（仮説五）？ 空になった墓（事実八）がこの説を砕いてしまします。本当に幻覚であるなら、死体が墓にあったはずです。死体を密かに隠す作業も伴わないといけません。するとやはり弟子は嘘をついていることになります。

六、蘇生説（仮説六）？ フランケンシュタインみたいに墓から出てくるといのは、伝道されたイエスの姿と一致しません。墓の空である説明はつくでしょうけども、弟子たちの唱道するイエスとつり合わないし、天に上げられた説明もつかない——弟子たちはやはり後半の話をでっちあげたことになります。

このようにどの方面から切りこんでも、復活を立証するよりはたやすい八つの事実を踏まえた上で浮上するのは、たった二つの選択、二つの結論しかない。なぜならこの問題は、目撃者が正しいか否かに関わっているからです。だから私がシャーロックの著書『Trial of the Witnesses（目撃者の審理）』という古典を読みもせずに復活を否定する人たちを尊敬できないのは、こういうわけなのです。著者は目撃者全員を集めた裁判現場を仮定して、証拠らしきものをイギリス式の裁判にかけてみました。または『Who Moved the Stone?（岩戸を動かしたのは誰？）』を読んでもいない人たち（もけしからん）。弁護士が著者で、復活を否定するために書かれたのですが、最後にはもともと説得力のある（復活肯定の）証言論となった著作です。

みなさんは「驚くべき選択」を突き付けられています。選択一（仮説七に相当）は、弟子たちが面子を保つために創作した物語で全ての話は嘘であるというもの。あるいは選択二（仮説八）、弟子たちは本当に体験したことを正直に話している。

さて、「事実」と「選択」と「仮説」の区別がつきにくいという方々、わかりやすくまとめてみましょう。ここに八つの事実と八つの仮説があつて、そこから仮説七と八のみに絞られるという驚くべき選択肢が形成されます。よって残された選択肢は「仮説」七の弟子たちは嘘をついたか、八の真実を語ったかの二つだけです。

私たちはこの時点で、クリスチャン信仰の全ては次の質問にかかってきます。果たして弟子たちは正直な目撃者で本当に見たままを語ったのか、それとも共謀者であつて立場を守るために嘘を作り上げたのか？ 私は、彼らが嘘をついていると信じられません。理由は四つあります。

理由1 目撃者として良い方向に激変した。

ペテロが不安定な性格だったと、誰もが同意するでしょう。仲間と一緒にあつても彼は頼りなかった。彼は恐くなって逃げ出し、主を知らないと言いました。ペテロはその不安定さと極端な性格のためにトラブルばかり起こしていました。そのペテロが、イエスの復活後、やじを飛ばす群衆の前で説教をしました。不動の岩としての運命を成就し、ついにはイエスと同じ姿勢で死ぬ価値は自分にはないと、自ら逆さになってはりつけになるのを希望して死んでいくほど勇敢になりました——ペテロはある歴史の一点で、突如このように激変したのです。歴史の一点とは、弟子たちが復活の説教をはじめた頃です。

ヨハネですか？ 彼は自己中心の極みでした。「雷の子」と呼ばれた兄弟の片割れです。ヨハネは自分の意見に反対する者を、天から下る火で焼き滅ぼしたいと願うような人物でした。ヨハネと彼の兄弟は母親を遣つて、イエスに天国での最上の位を所望する始末。弟子たちが復活の説教をはじめた時、ヨハネの性格は激変したというのが学者たちの一致し

た見方です。その彼が激変しました。「雷の子」と呼ばれる代わりに、彼が弱虫に見えるほどに限りない愛を示すようになり、「愛の使徒」として知られるまでになりました。

トマスは常に疑い続けました。彼は現実主義者です。彼は全てに疑問を持っていました。イエスが死を賭してサマリヤへ向かおうと、その旨を弟子たちに話した時、トマスは「われわれも一緒に行く。先生と共に死のうではないか」と言いました。勇敢な言動ですが、この時トマスは本当にイエスが死ぬと思っていたのです。これは人道主義的解釈です。

イエスがここを去って、天国でみんなの住まいを備えてくると論じ「私の行く道はあなたがたも知っています」と述べた時、弟子たちは「住まい」の事で有頂天に叫んでいたに違いありません。トマスは一言一句をきっちり聞いていました。彼は「先生がどこに行かれるのか私たちはわからないのに、どうして道を知ることができるのですか？」と問いました。トマスの性質を浮き彫りにする一貫した描写です。

イエスの復活が起こった時、ずっと疑っていたのは誰でしょう？ 同じ人物です。「私は主をじかに触るまで、この指を傷跡に差し入れてみるまで、決して信じない」と。そしてその時がきました。イエスはトマスの前に現われ、「さあ、わたしの手とわき腹に指を差し入れてみなさい」と言った。イエスは「見ずに信じる者は幸いです」と言いました。それは自明の真理であり、トマスを責めていたものではありません。彼は事実を述べたに過ぎず、トマスの試しに応じたのであり、それは私たちも今日行っているものです。イエスは「わたしの手に触れ、わきに触ってみなさい」と言われ、トマスは「私の主そして私の神」と叫んだ。

仏教と東洋宗教を生み出したヴェダンタ哲学発祥の地に赴いた人がト

マスであつたのは特筆に値します。ヒマラヤを突き進み、インドのマドラス付近で殉教したのはまさにトマスでした。当時世界の中でもっとも哲学的にきつく試される地域の信仰の使者となり、そして全く信仰が揺らぎませんでした——いつも疑ってばかりいた人物から不動の信仰者へ、完全な変貌ぶりです。

危機に直面すれば、人間誰しも変わるものだと言えましようが、嘘は人を大概悪い方面に変えいくもので、良く変わるといふのはまずありません。この弟子たちは良い人間へと劇的な変貌を遂げました。嘘からこのような変化が起こるとは考えられません。

理由2、間接的証拠と内的一貫性。

真実の間接的証拠もあります。マルコは（福音書を）異邦人にあてて書きました。マルコの福音書を読んで教えてみてください。キリストが自分を指して「人の子」と語っている頻度は、他のどの福音書よりも多いのです。

さて、マルコが嘘つきで、意識的に人をだますために福音書をしたためているのだとしたら、なぜ彼は、イエスの人間性を強く浮き彫りにする表現を使ったのでしょうか？ 彼の目的はイエスを神の子であると告げることです。もし彼が嘘つきならば、彼はイエスに「神の子」という単語を使わせたはずで、マルコの福音書は異邦人対象で、イエスが神の子であることを証明するために書かれました。しかも——誠実さを現す神の小さな隠された証拠となりますが——イエスが自分自身を指して「人の子」と言及する描写が、他の福音書より多くあるのです。

ところでイエスは**実際に**「人の子」と表現されました。というのもイエスはヘブライ人に向かって説教をしていたからです。ヘブライ人は『エ

『ノクの書』や『ダニエル書』などの預言書を読んでいる人たちであり、その書物に出てくる「人の子」という単語は、神の王国を打ち建て、天の雲に乗ってあらわれる救世主を意味していました。ですから、イエスが救世主という意味で自分のことを「人の子」と言及するのは、適切なのです。だが旧約聖書のことを何も知らない異邦人向けに執筆していて、イエスが神の子であると信じさせようとしている場合、筆者がよほどの正直者で事実を述べているのではない限り、イエスが「人の子」と言及している所を極力避けるはずで、目的を達成するためになぜ表現を変えないのか？ 生来の正直さゆえでしょう。私はこのような例をまだいくらかでも挙げるができます。こういった事柄を歴史学者は誠実さの間接的な証拠と呼んでいます。

もう一つだけ例をあげましょう。新約時代において女性証言者としては不適性とみなされてきました。弟子たちは当然そのことを知っていたが、なぜ女性を復活の最初の目撃者として紹介したのでしょう？ 彼らの社会では、女性の目撃者は無視されます。もし彼らが嘘つきならば、女性を目撃者として記録しないはずで、彼らがあるままの出来事を単純に語ったのだというさらなる内的証拠です。

弟子たちが（イエスの復活を説くまで）七週間待ったという事実に関し、これを弟子たちが虚構を練り上げた期間であると言う人たちがいます。この種の嘘を語る賢さがあるのなら、私の判断するところ、もっと早くに作り上げていたでしょう。彼らが七週間待っていたというのは、イエスがそのようにせよと命じたからです。これは誠実な行動です。偽りを作成するとしたら、時間をおけばおほく彼らの説教は不利になるからです。

理由 3 払われた代償

嘘を突き通すだけのために、弟子たちのような犠牲を払う人たちはいません。ヨハネ以外の弟子たちは全員殉教しました。バルトロマイはアルメニアにおいてムチで皮はぎにされて死んでいきました。トマスはブラマンの剣に体を貫かれて死にました。ペテロは十字架に逆さはりつけとなりました。アンデレは聖アンデレ十字にかけられました（聖アンデレ十字の名はここに由来している）。ルカは偶像礼拝を行う僧によって首をつられ、マルコはアレクサンドリアにて路上を引きずり回されて死んでいきました。彼らは自分たちの「虚偽」のために、想像を絶する代償を払っています。

理由 4、彼らは孤独に死んでいった。

偉大な——私思うにもっとも偉大な——聖トマス・アクィナス曰く、弟子たちと復活の真実の証拠は、彼らが孤独に死んでいったことにある。毎年このメッセージの大詰めにくると話すのですが、私は、弟子たちが寄り集まり、面子を保とうとし、話し合い、間違った人に賭け、その人の失敗（と彼らは見て）に打ちのめされ、虚構でもってその人を復活させようとする姿を想像できます。

私は彼らが虚偽を貫くためにグループプレッシャーを互いにかけてあって、一緒に集まっている姿も想像できます。なぜなら、誰も自分が最初の裏切り者となって仲間から非難され、全てをなし崩しにしたくないからです。

仮にボビー・ボイル、ジェリー・マッキンタイヤ、そしてリチャード・ウィリアムズがこれらの虚構を創作したとしましょう。当時はテレビも衛星放送もファックスも、電話だってありません。三人で一緒にいて多

大なプレッシャーをかけあっている限り、君、ジェリーはリチャードとボビーを裏切つて信頼を落とすまいとします。

しかし、君たちは離れてしまった。ジェリー、君はバルトロマイとなつてアルメニアに、リチャード君はトマスになつてインドへ、ボビー君はペテロになつてローマに行つたとしましょう。お互いの音信は途絶えました。電話がないから電話はできない、誰も君たちがどこにいるのかわからない。そして自分は偽りを言っているのはわかつているわけで、何も後代永久にこの嘘を信じてもらおうなどとは思つちやいない。そしてジェリー、君はアルメニアにいて、文字どおり皮はぎにされようとしている——つまりムチによつて皮膚がはがされるわけですから——この危機を脱するには「すべては嘘です」、「ゆるしてくれ、この町を出て行くから」と言えばすみます。

ボビーに知れるわけありません。リチャードだつて知りません。彼らと再会して報告しあう時、「俺はアルメニアで、大胆に言い負かしてやつたぜ。誰も俺の説教を忘れられないとき」と言えがいいのです。ボビーとリチャードは君が嘘をついているなんて知るよしもないのですから。

ボビー、君はインドで斬られそうになっている。ジェリーやリチャードに再び会うことはないだろうから、窮地を脱するために「今のは嘘です」と言えばことなきを得る。

リチャード、君はローマに行つた。君はもう少し目立っているわけだが、何せ命がかかっている、「悪かった、夢を見ていたのかもしれない」と言えがいいのであつて、こそこそと脱け出しフランスに向かえばよい。

トマス・アキナスが言つたように、でつちあげた話のために、彼らが離ればなれになつて、各自が究極の代償を支払い、孤独に死んでいき、

また、彼らの内で「本当じゃないんだ」という者が誰一人出なかったというのは、心理学的に考えられないのです。

孤独に死ぬ。その時から二〇〇〇年の時を越えて残つた証拠をくまなく調べても、弟子たちが乱暴な死を目前にして、説教をする心がくじけたという記述や記録は見つかりません。だからこそ私は、この弟子たちが嘘をついているわけではないと結論します。彼らは自分たちが本当に見て体験し真実だと思つたことを実直に語つたのです。

私は学生時代、^{くだん}件の論議をスタンフォード大の教授ラリー・トマス先生の前で展開し、教授が私にこう言つたのを覚えています。「ジーン、なるほど納得いつた。弟子たちは確かに自分たちの話を正しいと信じていた。ということ、先にあげた八つの事実のどれかが間違っているに違いない」。正直にそこまで言わせたのであれば、私が一本取つたことになりません。というのは他の八つの事実を説明するのは、ずっと簡単であるからです。もう一つの選択肢は何でしたか？

真実であつて、イエスは墓から出てきたのである。

さて、これが本当ならばどうします？ 他の事項も正しい。そこで私は永遠の神への信仰の第一歩を踏み出せます。私はやつと敷居をまたぎ、クリスチャニティがなんであるかをついに理解できる部屋へと入れたのです。私がイエス・キリストが死装束から脱して、岩を通り抜け、戸を通り抜け、青空に上がつていつた事を信じられるのであれば、細胞移動の技など彼にとつては難なくこなせるはずですから——墓から出るのに大きな爆発を起こさずにすみます。彼のうちに全てが存在し、万物を司っているというのも本当です。

よつて、神と同じ性質の要素がマリアの胎内に植え付けられ、聖霊を

通してナザレのイエスとして生まれたと信じるのも難しくありません。神は、私たちが彼を信じた時、神と同じ性質の要素を私たちに植え付けると言われます。**これが**本当の生まれ変わり体験です——いのちの生成、再生、私が神の言葉を信じて神とつながった時、神からのギフトとして、新しい創造物が私の細胞構成を貫き、置き換えられていきます。

これが正しく見たクリスチャニティの生成です。キリストが我々の内に宿り、栄光への希望をもたらします。クリスチャニティを理解するのに、私は神秘的になる必要もないし、酔狂になることもありません。私は生涯をかけて、イエスが権威を授けた旧約の約束を含む、神の言葉を追求することができます。神の言葉と約束にすがりながら、信心をベースに確信ある行動へ出るのが信仰です。この信仰によるつながりで、私の内に宿った命の要素、**キリストを死から蘇らせたのと同じ**生命要素を維持できるのです。この新しい生命の構成要素を保持している限り、私の本質を変えてゆくのです。あたかも放射性物質を浴び、目には見えない細胞変化が起こるかのように。

神は私たちの内に再生の命を植え付けます。ですから霊性というのは霊の表現であり、表に現れる正しさを霊の実りと呼びます。それは私たちの内で成長した新しい生命が溢れ出てきているのであって、この生命を維持するには神の言葉の信仰だけです。その信仰は「イエスは死から蘇った」という強固な岩のごとき基盤から生じます。この基盤は私に、イエスが他に述べたことも全て成就されるのだという信心をもたらせてくれるのです。すなわち、彼は再び戻ってこられるという事を。

(了)